
恋と魔法と妖剣と

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋と魔法と妖剣と

【Nコード】

N6955K

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

剣道部の助っ人になった羽山達。そこで水瀬は一人の女の子に出会います。人を寄せ付けたがらないその子にはある秘密がありました。その秘密が、とんでもない悲劇を呼び寄せて……目標10話完結！

恋と魔法と妖剣と 第一話

桜井美奈子の日記より

「剣道部の助っ人？」

羽山君の言葉に、思わずラーメンを食べる手を止めた。

場所は明光学園近くのラーメン屋“来々軒”。

建物はオンボロだけど、おいしいし安くてポリウムがあるから、生徒達には大人気のお店。

私達も学校帰りによく寄る店。

「そつだ」

水瀬君の前に座った羽山君が頷いた。

「……何だか、迷惑そうって顔だねえ」

未亜が言うのももつともだ。

何故か、羽山君は苦虫を噛み潰したような顔だ。

「いろいろあってな」

そう言うと、羽山君は餃子を食べた。

一口で餃子2つ平気で食べる羽山君の食欲は半端じゃない。

「でも、剣道部って一般人の人達用じゃないの？」

水瀬君が訊ねた。

そつ。

まず、剣道部って所から話がおかしい。

羽山君は騎士だ。

戦闘人種たる騎士と、一般人が肉体で勝負して勝てるはずがない。

いくら剣道といえど、それに変わるところはない。

水瀬君の疑問は当然だ。

「っていつか」

羽山君は、自分の皿が空になったと気づいて、水瀬君の餃子に箸をのばす。

「騎士部門だってあるんだぜ？」

ラーメンを食べていた水瀬君は、その動きに気づいて、慌てて餃子の皿をかつさらおうとするけど、それより羽山君の箸の方が早かった。

水瀬君のお皿の上から餃子が全て消えた。

「ひ、ひどいっ!」

「本当にヒドイ話だろう?」

「ぼ、僕の餃子!」

「また鈴紀がらみだ。迷惑だってお前だっと思っただろう?」

餃子が一気に羽山君の口の中に消えていった。

「うつつ……」

水瀬君が半泣きの恨めしそうな顔でその光景を見つめている。

気づいているのかどうなのか、羽山君はそのまま続けた。

「騎士だって　　というか、むしろ剣については騎士の方が重視

されるべきスキルだ。だから、剣道部だって騎士向けが存在する」

「……ウチにもあるの?」

私がかっさり訊ねたのは、未亜だ。

「昔は強かったんだよ?」と、未亜は言った。

「全国最強って言われて、剣道部に入るためだけに全国から騎士が入学してきたっくらい」

「ふうん?」

でも、おかしいな。

私、剣道部に騎士がいるってこと自体知らなかった。

自校の生徒にも影が薄いなんて。

「モグモグ……まあ」

餃子を口に放り込んだ未亜は言った。

「そんな時代も数十年前のことだし、段々弱くなってね。今じゃ、普通科の生徒達がやってる方が主流になってさ。騎士科の生徒達でもよっぽど剣に興味がないと参加しない位で……」

未亜は思い出したように言った。

「本当なら、今年の4月で廃部になるはずだったんだよ」

「…………へえ？」

そんなに実績無いんだ。

「ところが、今の三年で女子が二人、ものすごく強いの入ってね。この二人が全国制覇。それで廃部は免れたんだけど」

「つまり、女子剣道部でしょ？」

私は目の前に座る羽山君と秋篠君をまじまじと見た。

「…………」

「何を想像しているんだ」

それまで黙っていた秋篠君はあきれ顔で言った。

「騎士部門は男女一緒だからな」

「…………そうなの？」

「というか」

未亜は言った。

「ウチ、規模が小さいから、男子と女子分けていたら部が成り立たないんだよ」

「…………ああ」

私は思わず頷いた。

「それで助っ人ってわけだ」

「そういうこと」

羽山君は、水瀬君にコップを渡すと頷いた。

「水瀬、水な？」

「…………」

無言でグラスを受け取った水瀬君は席を離れた。

「それで」

私は水瀬君の残していたチャーシューを食べながら聞いた。

「鈴紀先輩絡みって？」

「さつき話をしたうちの一人、副部長が鈴紀の友達でさ」

羽山君は懺然とした顔で、水瀬君のどんぶりに残っていたラーメンを自分のどんぶりに移した。

「…………で、鈴紀が俺に言ってきたって訳だ」

「それで、羽山君が秋篠君を誘った」

「……いや」

秋篠君は首を横に振った。

「実は、俺の従兄弟が部活やっていてな」

「……ああ。そういうこと」

「大会に頭数が足りないっていうから、とにかく出てくれればいい
って約束で」

「……正直」

あーっ!?

空になったどんぶりを前に呆然としている水瀬君を後目に、私達
は会話を続ける。

「俺達男子部門はオマケだよ」

「オマケ?」

「ああ。期待されているのは男子じゃない。下手すれば」

水瀬君の手から水の入ったグラスをもぎとった羽山君は言った。

「他の女子だって、みんなどうでもいいのかもな」

「……どうということ?」

「警察の騎士警備部が、二人の採用を狙っているんだ」

水瀬、いつまで立ってるんだ?

声も挙げず号泣する水瀬君にそう言い放つ羽山君。

……ちよっとヒドいかな。

チャーシュー食べちゃったのは私だけだ。

「騎士警備部だけじゃないよ」

未亜が言った。

「陸軍の騎士科も」

「すごいじゃない、その二人って将来約束されたようなものね」

「二人はいいさ」

なんか　これ、変に甘いな。

羽山君は顔をしかめたまま、チビリチビリとグラスの水を飲んで
いる。

「気の毒なのは他の連中」

「他の？」

「だってそうだろう？周りは就職はともかく、剣が好きでやってるんだ。それが仲間の引き立て役というか　　噛ませ犬みたいな扱いじゃ、面白くないだろう？」

「剣道部って……裏を返せばそんな感じなの？」

「羽山君の考えすぎだと思っけど」

水瀬君は言った。

「二人が頑張ってるのは、後輩達に部費残してあげたいからだよ？」
「何でそんなこと知ってるんだ？」

「騎士警備部の採用担当してる人、知ってるから」

「お前が？」

「お父さんの愛人だから。スゴい美人さんでエライんだから」

「そういうこと、はつきり言うなよ」

「羽山はそういう理由だろうが」

おごりだ。

秋篠君は別に頼んでいたジャスミン茶を手渡してくれながら言った。

感謝！

「俺は別だ」

「従兄弟のため？」

「ああ」

秋篠君が頷くと、未亜がニタニタと変な笑みを浮かべた。

「にゃあ……女の子狙いだもんねえ……冬矢君とつやだっけ」

「え！？何それ！」

「桜井、ホントはゴシップ好きなんだな」

「コホン……とにかく」

「まあ」

秋篠君はカップから立ち上る香りを楽しみながら言った。

「明日、部活に顔を出すことになってるんだ。顔を出せば……おい、

羽山？」

秋篠君の横にいた羽山君が突然、お腹を押さえてうつむいた。青くなつた顔から脂汗が流れている。

「ど、どうしたの？」

「ち、ちよつとトイレ」

席を立つた羽山君は小走りにトイレに向かう。

「さてと」

何故か水瀬君が平然と席を立つた。

「支払いは羽山君で、と」

そのまま帰り支度を始める。

「おい？」

秋篠君が止めた。

「お前、友達に何か起きたら」

「友達のラーメン食べるからだよ」

水瀬君はニコリと笑いながら、ポケットから出した小瓶を小さく振った。

強力！よく効く下剤。

瓶に張られたラベルには、そう書かれていた。

「帰るか」

「じゃあ。羽山君、ゴチ」

「ごらっ！」

「じゃあ？美奈子ちゃん、払ってくれる？」

羽山君、ごちそうさまです。

翌日。

「テメエ！本当に覚えておけよ！？」

激怒する羽山君につれられて、私達は剣道部へ向かった。

騎士科が訓練に使うトレーニングセンターから少し離れた場所。小さくてオンボロな、ごちんまりとした昔ながらの建物。それが、剣道部の道場だ。

「普通科の剣道部は格闘技センター半分くらい使ってるのになぁ」
秋篠君がそうぼやくのも無理はない。

格闘技センターは本当に広い。
大学部や中等部と共用だけど、それでも下手なジムより施設が整っているんだ。

「しかたないよ」
未亜は言った。

「向こうは全国大会連続出場の強豪。こっちは趣味でやってる弱小部ってというのが、周りの評価だもん。それに」

「エーイツ！
ハーツ！」

道場の中からは気迫のこもった声が響いてくる。

「騎士剣道部がこうなっちゃった理由も、そういう所使っていたからってというのが、あるからねえ」

「どついうこと？」

「あの格闘技センターって、本当に最初は、騎士科の剣道道場を中心として建てられたんだよ」

未亜は言った。

「普通課の剣道部や、柔道部が隅っこで小さくなってやってるしかなかった。んで、つけあがったんだと思うけど……ある日、規模と実績を笠にした騎士科の生徒達が部活中にふざけて剣振り回して」

未亜はため息と一緒に吐き出すような口調になった。

「普通科の生徒、三人死んだんだよ」

「三人も？」

「よく手入れしてないスタンブレード振り回して、柄の部分から刀身がすっぽ抜けたんだって」

「スタンブレードの規格と運用が強化された事件だよ」

秋篠が言った。

「スタンブレードの柄と刀身を一体型にすることが義務づけられたのは、この事件があつてからだ。事件そのものは、学校やメーカー巻き込んだ泥仕合の裁判が示談になつたのは10年以上たった去年のことだよ」

「そう。それで、騎士科の剣道部は1年活動停止。ふざけた挙げ句が死人出した不祥事が響いて、部の評価はがた落ち。栄光の後の後は」

未亜は手を斜め下に動かした。

「落ちるだけ」

「……」

「今の連中がこんなボロい所にいるのは、周りに騎士がいない環境を望んだからだよ。誰も巻き込まないように」

「ふうん？」

ハアッ！

フンッ！

気迫の声と共に、ハードラバー製のスタンブレードがぶつかり合う。

狭い道場の中は、何とも言えない熱気に包まれている。

私は、ちらりと羽山君と秋篠君を見た。

何だろう。

それまでと二人の雰囲気が違う。

顔が本当に引き締まって カッコイイ。

騎士としての何かが、この熱気に目覚めさせられたんだろうか？

二人の体から、何だかオーラが放たれているようなそんな気さえする。

だけど

「ふうん？」

同じ騎士なのに、そういうのを全然感じさせない水瀬君がばやいた。

「こんなに動いて、お腹、空かないのかなあ」

「そういう問題じゃないと思うけど あっ」

未亜が私を軽く叩きながら言った。

「あそこあそこ！」

道場の一番奥。

今、防具に身を包んだ二人が剣を交えていた。

周りの人達と比べても、動きが段違いにいい。

まるで最初から打ち合わせでもしているのかと聞きたくなる位、

互いの攻撃を紙一重で交わり、交わされている。

「あれ、部長の月宮先輩と聖護院先輩だよ」

「……へえ？」

どっちがどっちだかわかんないけど、勝負は一瞬でついた……んだと思う。

片方のスタンプレードが脳天ギリギリで止められ、もう片方のスタンプレードの切っ先がのど元に突きつけられている。

「相打ち？」

「いや」

羽山君は言った。

「聖護院の突き技が先に入った」

そうなんだ。

「違うだろう。羽山」

秋篠君がそれを否定した。

「絶対、月宮先輩の一撃の方が先だ」

「そんなことはない」

「いや、絶対、月宮先輩だ」

……。

お互い、普段は仲いいけど、騎士としての何かが絡むとそうはい

かないらしい。

互いににらみ合いに近くなった所で、二人の手が同時に掴んだのは、

水瀬君の襟首だ。

「水瀬」

「どっちが先だった」

「……あんなの、相打ちだよ」

水瀬君は宙ぶらりんになったままで言った。

「実戦じゃ意味がない」

「意味が……ない？」

「実戦で大切なのは」

羽山君に降ろしてもらった水瀬君は言った。

「生き残ることだよ。あの場合、どっちが先で後でも、戦場じゃ共倒れは避けられない。一々差し違えていたら命がいくつあっても足りない」

「……なら、どうする？」

「本当に実力のある騎士同士っていうのは」

水瀬君は言った。

「相手の実力が自分と同等以上なら戦わないよ」

「なんだそれ」

「自分より強いのと戦わなければ、最強だから」

「納得できるか……おっ？」

気がつくのと、こちらに気づいたのだろう。防具の面をとった二人がこちらに向かって歩いてきた。

「……うわ。」

二人とも、びっくりするくらいの美人だ。

オレンジ色の髪。くりつとした猫のような瞳をした可愛い女性と、見るからに外人とおぼしき金髪の女性だ。

「久しぶりね。光信」

金髪の女性が、日本語で話しかけたのは羽山君だ。

「聖護院なんていうから、まさかと思ったが」

「相変わらず、鈴紀には弱み握られてるみたいね」

「うるせえ、ダイコン」

「っ！」

それまでの勝ち誇ったような口調はどこへやら、あからさまに力チンと来た。という顔の金髪の女子生徒が羽山君を睨んだ。

「少なくとも俺はイヤイヤ来てるんだ。ここで帰ってもいいんだぜ？」

「なら、帰んなさいよ」

「何？」

「鈴紀に言っておくわ。光信は使い物になりませんって」

「っ！」

「使いものにならない、負け犬に用はないの」

「言ってくれるじゃねえか……ダイコンの分際で」

「私にそんな口聞いて良いの？涼子さんとはメル友なんだけど？」

「よろしく頼む」

涼子さんの名前を出された羽山君は、ポンツと金髪の女子生徒の両肩に手を置いた。

「……節操のなさは相変わらずね」

休憩時間。

部員達が三々五々、思い思いの場所で休憩している。

「今度の大会は」

オレンジ色の髪をした女性が部長のつきみや・おうが月宮桜香先輩。

どこかで見たと思ったら、去年の生徒会副会長だった人だ。

「私達にとっても最後の大会だし、負けたくないのよね」

「就職絡んでるから？」

「え？ああ、私達」

月宮先輩が、金髪の副部長さん、聖護院エリカ先輩と軽く目配せした。

「大学進学組だから」

「へ？」

「騎士として仕事つても悪くないけど、もっと別なこともしたいのよ。出来れば一生、長く続ける仕事見つけたいし。エリカはエリカで家継がなくちゃいけないし」

「……あの旅館と教会か？」

「そう。女風呂除いた光信が逆さづりにされたあの尖塔、まだ残ってるわよ？」

「……勘弁してくれ。あれは鈴紀にそそのかされて」

「その気になる辺り、あんたって本当に単純よね。で？男子、任せて良いわね？」

「負けてもいいんだらう？」

「ええ」

エリカは頷いた。

「無様に負けてきなさい。笑ってあげるから」

「くそっ……おい、水瀬、お前も参加しろ！」

「僕？ダメだよ」

水瀬は、ずっと視線を一カ所に向けたまま言った。

「魔法騎士は、そういうの、出ること禁止」

「ああ……」

桜香は、ポンツと手を打った。

「水瀬君だっけ？君、第四分隊なんだ」

「はい。だから、僕はダメです」

「残念だなあ」

エリカは言った。

「見るだけで、そのエロガキなんか比べ者にならない位、筋がよさそうなのに」

「エロガキって誰だよ……」

「光信、黙れ……どうしたの？」

水瀬は無言で開かれたドアを指さした。

そこには、他の部員と混じることもなく、一人だけ開かれたドアから差し込む光を浴びながらスタンブレードの手入れに熱中する女の子がいた。

銀髪を肩の辺りで切りそろえ、リボンを結んだまるで日本人形のような女の子は、剣と自分以外、この世に存在しないと云わんばかりの熱心さで手入れに没頭している。

「高原さんのこと？」

「高原？」

たかはら・ういむ

「高原来夢。次期女子部長候補」

「……無理じゃないかな」

水瀬はぼつりと言った。

「あれじゃ」

「？」

「……おかしいなあ」

水瀬は首を傾げた。

「あの子……でも」

不意に、来夢が立ち上がると、スタンブレードを手を外に出た。

「ごめんなさい」

水瀬はそう言つと、その後を追った。

恋と魔法と妖剣と 第二話（前書き）

すみません。でっちの助六です。いろいろありまして断筆状態でしたが、第二話を作りましたのでお届けします。よかったら読んでください。

でっちの助六 拝

恋と魔法と妖剣と 第二話

道場を離れた来夢が歩いていく先には、小さな社がある。

明光学園の敷地に神社があることを知ったのは、その目立つ銀杏の林のせいだ。

銀杏を拾って生活の足しにしようと足を運んで以来、小さな社は幾度と無く水瀬の寢床として利用された過去がある。

銀杏の葉が色づき始めている。半ば青い葉を樹から奪い取る風は柔らかい。

風の匂いも、夏の盛りを過ぎ、物静かな優しさを含んでいる。

それ感じ取った水瀬は、ああ。もうすぐ秋だなあ。と、そんなことを思った。

来夢の歩き方は、相当、剣の訓練を受けた者独特のそれ。

後ろに対しても隙というものが無いと褒めてやりたいが、その中に水瀬はいなかった。

水瀬から見ると、どこか、まだぎこちないのだ。

10でいったら7が良いところ。

未完成さがその挙動に明らかに見て取れる。

ただ

「？」

水瀬は、何度となく、その歩みを見ながら首を傾げた。

自分は、あの子を過去に見たことがある？

覚えがない。

でも、何だろう？

どこかで見たような、この既視感は何だ？

地面に敷き詰められたような銀杏の葉を踏みしめながら歩いてきた来夢は、不意に社の前で足を止めた。

そして、手にしていたスタンブレードを引き抜くと、何度も柄の握り具合を確かめていた。

柄を左に握っている。

どうやら、来夢は左利きらしい。

「？」

一瞬、追跡に気付かれたかと思ったが、どうやら違う。物音も立てずに銀杏の樹の影に隠れて気配を消した水瀬を、来夢は見つけることが出来ていないのは、こちらを見ない来夢の動きから明らかだ。

「何……してるの？あの子」

耳をそばだてた水瀬の耳に、来夢の呟く声が聞こえてくる。

「……今度こそ」

来夢は、スタンブレードを一度、鞘に戻すと社に手を合わせた。

「今度こそ、上手くいきますように」

「？」

一通りの祈りが終わったのか。

来夢はスタンブレードを鞘から抜いて振りかぶると、気合い一閃。剣を振り下ろした。

「……」

残心の姿勢のまま、余韻に浸っているのか、ぴくりとも動かない来夢は、スタンブレードを横に一凧ぎして再び鞘に戻した。

その間、ずっと来夢は瞑目したまま。

「……」

すつつ。

大きく息を吸い込んだ来夢は、

「やったあああつつつ!!」

突然、何度も飛び跳ねながら歓喜の声を上げた。

「完璧！パーペキだあつ!!」

それまでの剣士然とした態度はどこへやら。来夢は年頃の元気な女の子として、元気に飛び跳ねている。

その動きが不意に止まったのは、来夢が水瀬の存在に、その時初めて気付いたからだ。

「あつ」

凄まじく気まずいと言わんばかりに、凍り付いた来夢。

自分がやっと気付かれたと知った水瀬は、銀杏の影からこっそりと頭を下げた。

「こ……こんにちは。あの」

何とか、話を合わせようと、水瀬はおずおずと問いかけた。

「さつき……かけ声で上げていた」

「……」

わなわなと、体を震わせる来夢の顔は真っ赤だ。

「ア ストラッシュって……何？」

「っ!!」

来夢は、水瀬を突き飛ばすと、その場から逃げ出した。

「？」

「何してたんだ！」

水瀬が道場に戻ると、練習は再開されていた。

「お前が戻るまで、模擬戦お預けだったんだぞ!？」

あぐらを掻いた羽山が水瀬の襟首を掴むと、ヘッドロックして水瀬の頭をグリグリやり出した。

「痛い痛いっ！」

「こら光信！」

エリカが怒鳴る。

「暴力禁止！弱いものイジメしない！」

「こいつのどこが弱いヤツだ！」

羽山が怒鳴り返した。

「コイツは俺より強いぞ!？」

「ウソおっしやい！みつともない！」

「本当だって！」

口げんかが始まった羽山とエリカの間近で、水瀬は自分に突き刺さる殺意に気付いた。

道場の端で正座する来夢だ。

凄まじいほどの眼光でこちらを睨み付けている。

眼光を物質化することが出来れば、凄まじいモノが飛んでくるだろうことは請け合いだ。

水瀬は、あのアバン　トラッシュとかいうのは、見てはいけない何か、願掛けやおまじないの類だったのかなあ。と、全く見当違いのことを考えたりもしたが、考えた所で飛んでくる殺気をどうすることが出来るわけでもない。

どうも、敵を作ったらしい。

それだけははっきりとわかった。

「じゃあ、いいわよ」

エリカが軽く咳払いをして言った。

「その子の実力、見てあげようじゃない」

「ノド痛てえ……バカダイコンが。後でほえ面かくな？」

「あの……羽山君？何だか、歓迎したくない事態になったご様子ですが？」

「喜べ水瀬」

羽山は怒り心頭の顔で言った。

「もし、万一、例外的に、無様に負けるようなバカやらかしたら……」

……

「したら？」

「俺からぶん殴られる特典付きだ」

「いりません」

「ラーメンと餃子、卒業するまで俺におごるというオプションまでついているんだ。どうだ？とつてもお得だろう？」

「羽山君……頭、大丈夫？」

ガンツ！

「痛いっ！」

「ぐちゃぐちゃ言わずにやってこい！俺の面子潰したらブツ殺すぞ！？」

「理不尽だなあ……」

「うるせえ！ダイコンっ！剣貸せ剣っ！」

「ダイコンダイコンうるさいのよ！この単細胞！」

エリカは羽山に怒鳴ると、後輩達を振り返った。

「高原っ！」

「はいっ！？」

びっくりした顔をした来夢が、自分を指さした。

「わ、私ですか？」

「ちよっと　その子の相手してあげて」

「で、ですけど私、素人の、しかも女の子相手に剣振るうのはちよ

つと……」

「心配するな」羽山は言った。

「コイツはこれでも男だ」

「……え？」

「見てみるか？」

羽山は水瀬のズボンに手をかけた。

「アレ丸出しにしてやれば、嫌でもわかるだろ？」

「やめてエッチ！」

「……ホント」

正座したエリカが冷たい視線を羽山に投げつける。

「たいした博愛主義ね」

「だからといって」

エリカのスタンプブレードをマトモに脳天にくらった羽山は、タンコブにタオルを当てながら抗議した。

「これはないだろう？」

「……女だけじゃなくて、男まで対象とは」

「んなわけあるか。俺は涼子さん一筋だ」

「よく言っつわよ。ズボンに手をかけた時のあの動きは手慣れていたわ」

「……同人誌の読み過ぎだ」

そんな二人の前。

道場の中央でスタンプブレードを手に対峙するのは、水瀬と来夢だ。

互いに一礼すると、間合いを取った。

「……あのね？」

下段の構えを取る水瀬が、おずおずと訊ねた。

「さっきのこと……怒ってるの？」

「試合中に」

来夢は冷たい表情のまま、剣を下段にしっかりと構えた。
「相手に話しかけるのは、ルール違反です」

「……そう」

水瀬は、来夢の構えを見て、うずうずしていた。
筋がいいのは間違いない。
だが、構えがなっていない。
力が無駄にかかっている。これではダメだ。
だけど……

何だろう。

水瀬は、また、首を傾げた。

僕は、この子とどこかで会っているの？
この既視感は、何？

高原来夢

出会った覚えはない。
親戚なはずはないし……

「問答無用　　行きますよ？」

すっ。

膝が曲がり、腰が低くなる。
来夢の持つスタンブレードが下段からゆっくりと動いた。
刃を横に寝かせ、まっすぐに伸ばされた手の上に剣の嶺が乗る。

「お、おい？なんだアレ」

「……」

エリカは首を左右に振った。

「あんなの……見たことない」

恐ろしく奇妙な構えを前に、

「……へ？」

水瀬はきよとん。とした顔で動きを止めた。

「その……構えは……」

「覚悟っ！」

気迫と共に動いた来夢は、呆然としたままの水瀬に容赦なく襲いかかった。

グシヤッ！

ドンッ！

「この馬鹿野郎っ！」

「高原っ！」

「医者よ医者っ！」

……

……

…

一体、何が起きたのかは考えたくない。

ただ、水瀬は、自分が夢を見ていることは、はっきり自覚してい

た。

でなければ、この人が僕の前にいるはずがない。

水瀬の夢。

それは、水瀬の過去のことだった。

2年前。

国連軍呼称“ホテル・ライン”

魔族との戦争において、“大反攻”作戦が実行に移された頃。

当時の水瀬が所属していた部隊は、警視庁騎士警備部と共同作戦をとっていた。

連日の戦闘の中で、水瀬はある人物を出会った。

背の高い、ニヒルな顔立ち。

語る言葉も皮肉めいた物言いが多く、軍服もラフに着こなす、警官とは思えないほどやさぐれた人物。

いつもタバコを手放さない。

タバコの匂いの中に、妖魔特有の血のにおいがプンプンする、危険な人物。

警視庁の高原警部だと、名前は人づてに知った。

思春期の男の子が、不良に憧れるように、水瀬もまた、彼に憧れた。

水瀬は、彼になりたいと、本気で思っていた。

彼の歩き方や仕草。

そのしゃべり方。

ちょっとしたことまで、何とかマネようと、無駄な努力をしていたのが、当時の水瀬だった。

そんな水瀬が、一つだけ出来ないことがあった。

タバコだ。

どうやって火をつけているのか。

水瀬は、それがどうしてもわからなかった。

警官達の忘れ物から盗んだタバコを一本、こっそり物陰で口にくわえ、火をつけても、タバコの端が焦げるだけでどうしても火がつかない。

警部は格好良くタバコを吸っているのに、どうして？

すっかり、タバコに熱中していた水瀬が、自分の前に誰か立っているのに気付いたのは、その時だった。

高い背が日の光のほとんどを水瀬から奪う。

不意に、あたりにタバコの匂いが立ちこめた。

「？」

逆光で顔が見えない。

まぶしそうに、水瀬が上を見上げた時、

「くわえたまま、息を吸え」

声は重いが、どこか愉快さをかみ殺したような、人をバカにしたような声でした。

水瀬は、それが誰の声か知っていた。

「あ……あの」

水瀬は、本気で気まずく思った。

自分を見下ろしているのは、高原警部だった。
別に怒っているようには見えない。
どうやら面白がられている。
それだけはわかった。

「口にくわえて」

高原警部は、もう一度そう言うと、ポケットからタバコを取りだし、口にくわえた。

「息を吸え」

水瀬は言われたとおりに息を吸った。

火をつける前のタバコ独特の匂いと、焦げた先端の匂いが混じったものが、水瀬の気道に入り込んでくる。

「そのまま」

ポケットから取り出したジッポの火が、水瀬のタバコの先端に火をつけた。

生まれて初めて吸ったタバコの煙が、肺の中へすぐに飛び込んでくる。

ゲホッ！

水瀬は激しく咳き込むと、口元を抑えた。

頭がグラグラして気持ちが悪い。

こんなもの、何がいいんだろう。

指に挟んだタバコを前に、困惑する水瀬に、高原警部は言った。

「気持ち悪いだろう？」

「……はい」

「そのうち、慣れてくる。これが無しだと耐えられない位にな」

「ほ、本当ですか？」

「こんな気持ち悪いのに？」

その言葉を、水瀬は口には出さなかった。

「娘からはやめろやめろの大不評だが……父親とタバコはワンセット」

トだ」

「……はあ」

「そのうち慣れる。二十歳過ぎてからな？」と小さくウインクした。

「それと、だ」

タバコをどうしたのか迷う水瀬に、高原警部は言った。

「ガキが警官の前でタバコ吸うとどうなるか、知っているか？」

「えっ？」

「こつだ」

ガンッ！

水瀬の脳天を高原警部のげんこつが直撃した。

「こつ！」

瞼の裏に星が飛んだ水瀬は、その痛みに思わず頭を抱えた。

悲鳴すら言葉にならない。

「わかったか？」

そう訊ねられても、水瀬は頷くのがやっとだ。

父親のげんこつより痛いものが、この世に存在するとは思わなかつたのが、水瀬の本音だ。

「人前で吸うのは二十歳過ぎてからだ

それ以下はバレないよ

うに吸え」

警官とは思えない一言を残して、高原警部は踵を返した。

「ああ。そうそう」

ピンッ

そんな音がして、高原警部の方角から、弧を描いて飛んできたも

のが、水瀬の頭に命中した。

痛くない。

すごく軽いものだ。

「？」

手に取ると、握りつぶされたタバコの空箱だった。

「捨てておけ」

理不尽だ。

その時は、そう思った。
だが、水瀬はその理不尽さが、何だかとても好きになった。
タバコは吸えなかったが、水瀬は高原警部を追い求めることはやめなかった。

……ああ。

あの人の得意技も、平突きだったなあ……。
左利きで、突き技の鋭さはすごいものがあったっけ。

……

意識がはつきりしてきた。

体が妙に痛い。

どこかケガしているな。

体の感覚が戻るのを感じながら、水瀬の意識は、夢から遠ざかっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6955k/>

恋と魔法と妖剣と

2010年10月8日13時43分発行